

うたそら

第9号

2022
July

7

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	04
テーマ詠欄 「色」	21
一首評 「そらよみ」	26
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	28
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	30
次回予告・編集後記	31

うたそら 第9号

発行：2022.07.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

次号予告 うたそら 第10号

連作欄 8首の連作 自由詠
 テーマ詠欄 「涼」
 一首評「そらよみ」
 短歌リレーコラム「望遠鏡」
 リレーエッセイ「いちごいちえ」



短歌募集

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

第10号 22 8/31(水) 24時
 ●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「涼」1首

第11号 22 10/31(月) 24時
 ●8首の連作 自由詠 ●テーマ詠「果物」1首



編集後記

あつというまに短い梅雨が終わり、全国的に本気モード全開の夏がやってきました。こちらはクーラーをつけていてもまだ暑い部屋で編集作業をしていますが、皆さまはいかがお過ごしでしょうか。水分と塩分の補給をお忘れなく、どうか無事に夏を乗り切ってくださいね。

このたびは、短歌誌「うたそら」第9号へのご寄稿をいただきまして、ありがとうございます。ご参加くださった皆さまに心より感謝申し上げます。第9号の参加歌人さまは86名、連作欄には66名、テーマ詠には73名のご投稿をいただきました。

今回のテーマ詠のお題は「色」。さまざまな「色」の短歌が集まり、夏らしくカラフルな紙面となりました。

一首評「そらよみ」は第8回です。歌を投稿するだけではなく、読んで感想を伝える／もらうことで、得られる気づきや喜びもあるのではと思います。また、「短歌は作らないけど読むのが好き」という方の、「そらよみ」コーナーだけのご参加也大歓迎です。

短歌なリレーコラム「望遠鏡」は田中翠香さん、リレーエッセイ「いちごいちえ」は鈴木ジェロニモさんが書いてくださいました。ありがとうございます！

今号も皆さまのおかげで読み応えのある「うたそら」をお届けすることができました。どうぞごゆっくりお楽しみください。

「うたそら」では Twitter での呟きもお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号は8月末×切の9月初旬発行、テーマ詠のお題は「涼」です。まだまだ暑さが厳しい折、皆さまにすこしでも「涼」を感じてもらえるような、涼しげな作品をお待ちしております！

編集鳥 千原 こはぎ



うたそら 第9号

ご参加
 いただいた
 みなさん (五十音順)

あき子	@ponko_san	五十子尚夏	@kate_kawagishi
麻数	@umberhemp	池田竜男	@tankdragonman
麻倉ゆえ	@AsakuraYue	石川順一	@Hitler57
あなぐま	@matobarium	伊月杏	@izuki_an
阿部蓮南	@renal815	植田とうこ	@tocotocotouko
天野うずめ	@uzume_no_hijiri	宇祖田都子	@Shinnsyutu2020
有村桔梗	@chattenoire_k	泳二	@Ejshimada
歩歩	@subperf	大坪命樹	@hswelt
		岡田濫	@OotsuboMeiju
		小崎 ひろ子	@hitoritsukimiru
		音平まご	@nandemonaihi16
		梶原一人	@MrDekopin
		歌島孟	@Sinn1990
		がね	@amicus08
		かうすまあ	@inari_karasuma
		瀬井戸	@kareido1111
		河岸景都	@kame073
		北村美晴	@kitaya_misomiso
		北谷雪	@kmmr_r09
		君村類	@gyonhime2
		きょんひめ	@tkuro2016
		くろだたけし	@kiokoizumitanka
		小泉キオ	@_yu_ca_li_
		古都 梨衣子	@izumitakeishi
		咲兵衛	@satohio_tanka
		佐藤裕	@satohio_tanka
		佐藤水魚	@satohio_tanka
		汐射ハルカ	@haru_c17h17cl2n
		紫苑	@purple_aster
		西鎮	@xi_zhen_ivUT
		雀来豆	@jacksbeans2
		白石 夜花	@yohana_no_sekai
		寿司村マイク	@XHksbNR4ww1wj8M

9

リレーエッセイ

いちい

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ

書き手

雑巾

鈴木ジェロニモ

れど、隅の方は木材のささくれが酷く、その隅の方を雑巾掛けするのが嫌だった。朽ちた木材が雑巾に引っかかって、なかなか前に進めないのだ。

稽古開始のおよそ十分前から始まる雑巾掛けは、さながら中央付近の陣取り合戦だった。しかし空手の先生に見られているから、中央を陣取れたからといってはしゃいだり、隅の方になったからといって不貞腐れたりすることは許されない。道着に帯を締めた僕たちはかりそめの克己心を見せ合いながら、それぞれの床を強い気持ちで拭き進めた。

ある日、稽古を「まちたい」でやることになった。まちたいとは町の体育館、つまり町立の、公営の体育館のことだ。まちたいに到着した僕たちはまずその広さと綺麗さに驚いた。まちたいは先述した古い体育館の四倍ほど大きく、公費によって頑丈に、清潔に保たれていた。先生から指示が入る。

「今日は雑巾ではなく、モップを使うように。」床のワックスを剥がさないようにモップを使っ

て欲しい、というまちたい側からの指示に従うことになった。体育館の側面にある、壁と同じクリーム色をした鉄の扉を開けると中が倉庫になっていて、そこにモップが並んでいる。鮮やかなオレンジ色のモップがいくつも並んだ倉庫の中は、太陽のように明るく見えた。僕は真昼の空に手をかざす気持ちでモップを掴み、倉庫を出て、まちたいの床に立った。そしてモップを掛けた。

ワックスの効いた床の上を、オレンジのモップが滑らかに進む。速い。気持ちいい。初めて自転車に乗れたとき、もしくは「流れるプール」の流れに沿って泳いだときのような、自分以外のものを利用して自分のからだが想像以上の速さで動くことによる昂りを、僕はモップ掛けから得ていた。モップを掛ける僕の中からだとはとても軽い。床を進むモップは鳳凰の翼のように、まちたいの光を受けてしなやかに波打った。

鈴木ジェロニモ



壁だった鉄の扉を開けるととき後ろから追い越していく光

たえなかすず	@suzusuzu2009	廣珍堂	@Hirochin_dos	村田一広	@mucci2022
多香子		飛和	@hiwa_towa	森内詩紋	@Nj40Ev95glcRpu
高田月光	@8QdMu8WOf9vbi	福山桃歌	@momoka_fukuyama	杜崎ひづく	@kousei_tsurun
高橋良	@takahashi_ry5	細川エリカ	@luvlukasen	杜野詩季	@4kitanka55
田中翠香	@suiakinenbi	真岡まな	@mao_or_mana	矢野目知桂	
千原こはぎ	@kohagi_tw	まさけ	@mskpompomfuwa23	ゆやゆき	
月硝子	@geshodo	真瑠	@marufor	ゆりこ	@b7282e_akaneiro
ともえ夕夏	@croissant_hey_z	丸瀬まろ	@maruse__maru	龍翔	@oppizuntsuan
中村育	@hknrik	御糸さち	@MEATsachi	れいあむ	@Re14m_bot
中村成志	@nakam8	深影コトハ	@cotoha_mikage	和田晴美	@hnm143ponta
奈瑠太	@nalda_aa	水沼朔太郎	@smizunuman		
西淳子	@jacky244Ray	南野ひさ奈	@minamino_1009		
西村曜	@nsmakira	水也	@m_iya-o		
ネコノカナエ	@nekonokanae_uta	深山睦美	@57577_77575		
薄荷。	@aieohimeco	虫武一俊	@mushikate		
早月くう	@k_hayatsuki	六浦筆の助	@Tohakumutun5057		
雛河麦	@may_spica_358	六殿めれう	@mereumumai		

計86名

たくさんのご参加
ありがとうございます！



分を、ありとあらゆる視線から詠み切ってしまったら、それ以上の歌が作れなくなる。歌作りにおいてなにも出てこない、という状況は詠みたいこと、詠めることは詠み切ってしまったという、ある種のガス欠状態に近いのではないだろうか。となると、同じ題材にこだわるよりも新たなものに変更した方がいい歌を詠める。少なくとも自分はそうである。それも日常を題材にした歌で行き詰まりを感じているのだから、少なくとも題材は日常生活と地続きにある実景はやめた方がいいだろう。海王星人に誘拐されて人体実験される歌とか、君は来週からセントビンセントおよびグレナディーン諸島支店で勤務してくれと言われた時の歌とかを考えるのがよいだろう。

ただ一方で自分が空想できる範囲とは、結局は知識や体験がベースになっていることがほとんどだ。自分の実生活が驚きと冒険に満ちたものでないのなら、本を読んで様々な知識や体験を間接的に得るのが、新たな方向性の歌を作る上で重要であろう。いや、なにも海王星に関する論文を片端から読破しろとか、セントビンセントおよびグレナディーン諸島に関する国連の報告書を読めとか、そんな無理難題は言わない。しかし多少の知識、または名称を知っているだけでも色々想像することはできるし、全く何も知らないゼロの状態なら歌を作る際に役立てようがないが、ひとつでも知っていることがあれ

ばそれを足掛かりにして、様々な方向に発展させることができる。

だから、歌を作りたいなら歌集だけでなく、社会や自然科学をはじめ多様な方向に向けてチャネルを合わせられるよう、常にいくつものアンテナを稼働させておきたい。それは歌のみならず、生き方をも豊かにしてくれるだろう。

天球に淡く反響する光つつじのつぼみまだ固くある 笹本碧

科学的、社会的な知識や経験は深く広ければそれに越したことはないだろうが、この歌のように「天球」という一単語を入れるだけで、歌の世界に圧倒的な広がりを持たせることができる。しかしそのためにはもちろん「天球」という言葉を知らなくてはいけない。そういうことだ。なにもニッチな分野から誰も知らないような単語を拾い集める必要もないけれど、単に歌集さえ読んでいれば短歌を作れる、という説には抗っていきたい。歌をたくさん作り、たくさん読み、歌壇事情や短歌史に造詣の深い人たちを感じさせることばかりに腐心して作歌していると、かえって歌がやせ細ってしまう。歌には個人と社会をつなぐ回廊の役割もあると思うので、広く世界に目を向けることを常に意識したい。

だが、天才はいる。悔しいが。

三月の真つただ中を落ちてゆく雲雀、あるいは光の溺死 服部真里子

初めて読んだとき、吹っ飛ばされた。こんな



連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそう

魔法

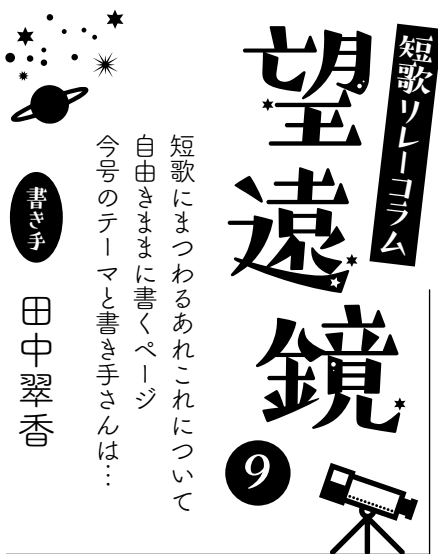
あなぐま

ねこやなぎ花瓶のなかでいきものになるのをじつとみていた呼吸には名前があつてよく知った人の発するそれを聴いている呼びかける声がふと止み失われる体温と引き換えに静寂横向きに寝かせてあげた たましいの去ったからだは寝返りしない老いも死も平等に来るショーケースの中に輝くモンブランケーキ前ばかり見て歩くのだ日常を詰めたキャリーを転がすために乗り越えたりするのはもつと先でいいあなたに似てきた髪の毛を梳く金色の鳥の尾羽を引き出しに仕舞っていつかまた会いましょう

オレンジ

阿部蓮南

一日の始まりのバス ナプキンを英語でなんて言うかの話ホームとの隙間に落ちそうなものは今日渡したい手紙しかない打ち込みのピアノの音がよぎるとき自分と同じヘルツが欲しい洗顔の水がこぼれた勢いで芸術点を取りにいく夏柑橘の甘酸っぱさで育つからハートはいつもオレンジで描くどこまでが好きかを本に書き込んで直線ばかりの世界が刺さる晴れた日に駅の電気が明るくて協調性を少し分けてよ気のままという意味を込めポケットの四つ折りの紙には「フリーハグ」



短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手

田中翠香

テーマ
短歌コラムが
書けません

短歌コラムが書けない。ご冗談でしょう、と言われる。いや、本当に書けない。天地神明から鰯の頭にまで誓って書けない。なんならさつき自由の女神にも誓った。

多くの歌人はコラムがうまい。何冊も歌集を出して総合誌にひっぱりだこの歌人はもちろん、結社誌などに載る若手歌人も、みんなエッセイやコラムがうまい。とくに根拠はないけれど、歌を詠む人は実際に起きた周りの出来事や自分の心の動きを題材にすることが多いから、エッセイと相性がいいのだろう。そう考えてみると、歌人がエッセイの熟達した書き手であるのは当然である。

然である。

しかしごくまれに虚構ばかり詠んでいる歌人という種族もいて、自分がまさにこれなのである。そんな歌人がエッセイやコラムを引き受けると地獄の苦しみである。毎日が家と職場の往復運動、休みは朝寝をして昼寝をして夜寝をする。ポエジーなど発生する余地がない。奇跡的に発生したポエジーはたちどころに消滅する。

ねむいねむい廊下がねむい風がねむいねむいねむいと肺がつぶやく

永田和宏

休日の私である。いや、これでは歌人としていけない、と思い立つて歌集を鞆に放り込んで近所のカフェに向かうこともある。周りには勉強をする高校生、自分が異世界に三回転生してもなれなような優秀な雰囲気漂わせるビジネスマン、青春を謳歌する大学生らしきグループで、自分。これはひどい。逃げたい。火星に亡命したい。いや、もっと遠くに。伝説のダイヤモンドの星、かに座55eあたりに。しかしそうしたキラめきのあふれる大学生だからこそ、
間十二、夜空の青を微分せよ。街の明りは無視してもよい

川北天華

という超弩級の作品を生むこともある。こうした歌は、まさに今、高校や大学で人生の一時期をリアルタイムで過ごしている人間にしか詠えないのではないかと思う。

そんな気持ちで過ごしているから、時々おじさんやおばさんが日常の喧騒から離れてひとりで

カフェの席でぼうっとしているのを見ると、なんとなく同志みたいな感情になる。

おばさんでごめんねというほんとはごめんとかないむしろ敬え

岡崎裕美子

もはや「おにいさん」を自称すると心に何割かの罪悪感を覚えざるを得ない年頃の人間としては、この歌の主体の感情が多少なりとも理解できる。さすがにあと数年したら自称も「おじさん」に切り替えなければいけないかな、と覚悟しているがおじさんもおばさんも悪くない。オケラもアメンボも生きている。おじさんもおばさんも生きている。心を強く持て。人生長いぞ。しかしせっかくカフェに来ているのだからほかにすることもないし、黙ってカフェオレをすする。そして途中で歌集を読むのに飽きて妄想をする。

よく言われることだが、短歌は日常の微細な感覚や発見を掬い取るものだと言われている。これはある程度は的を射ている気がする。世界の海でトレジャーハントをしているのでもない限り、たいていが明度も彩度もぱっとしない日常が続く。だとすれば日常の当たり前の出来事を歌にしたところで、特別優れた歌ができるとは考えにくい。であれば、日常のふとした違和や発見を歌にするのが妥当である。実際、そういう歌がかなりの割合を占めるだろう。ただそうした方向性の歌が多いということは、詠む方向性がある程度固定化されるということである。物理的に不可能ではあるが、日常の中のとあらゆる部

締切日に間に合ってよかった。

天野うずめ

音が持つ感覚として雨は降る気配を消してしまいたくなる折リたたむ傘の重さに付随して真新しさを吸い込んだ梅雨味方とはすぐには来ない雨降れば光って見えるマンホールのふた五月から変わっていないカレンダー暗闇はまだ始まってない傘をさすまではいかない雨が降りひとつひとつの単語がこぼれるこれ以上の何かが起こると思つて確かめている雨雲リーダー参考になるんだつたらしいけれど置かれたままの自転車がある説明が難しいけど聞いてほしい夢を見たけどもう時間だね

せんちめんたる

有村桔梗

線香花火持つゆびすこしひからせる真夏の星と星のあひだに路線図をゆびでたどればやすやすと鮮明になるセンチメンタルもうすこし生きてゐたくて両方の生命線をきれいに洗ふハンドルを軽く握つて走り出す自転車は夏の匂ひしてゐる夏至祭のあはひにひかるひとすぢを迷はずにゆく少年の足六月の雨より生まれあぢさはすこし震へる臓器のやうに芍薬のひとよごとにほころんでふつ、と飛び立つたましひがあるいちめんのしろつめくさに眩んでも立ち止まらずに走つてゆくよ

端歩を突くように

五十子尚夏

薔薇園の薔薇に降る雨うつしく気のふれてゆくまひるだろうかビューラーに引き上げらるる睫毛など巨き力に背きていたり人の道はずれてしましそうな気がしている蝶に見つめられたら美女と美魔女と魔女のあわいをゆくようにウィノナ・ライダー銀幕に映ゆはつなつのピアノに伏してそこだけが透明マントに覆われているワクチンのように広まる紫陽花に蝕まれつつ夜の深さを端歩を突くようにしずかにそれでいてあなたの髪に触れていたのだひかり降る音楽室にハイドンとベートーヴェンは睨み合いたり

夢八夜

池田竜男

年若いたふたごおぼるハンバーク 山羊肉らしい、伝書を食べたたましいは紙めくるたびあらわれてめくつてもめくつても飛んでいく責任一枚になりたいわけじゃないたましいきみに何枚も何枚も貼るうそをつく黒眼どんどん黒くなりあなたとわたしいない黒煙林という名もなき名へと沈みゆく一本の樹に片眼奪われたくましいキリンがかじる廃屋の肉のないうつくしい半身肉屋の肉にうまれかわるのいやだなと思ふと肉屋の肉見たくなるまたぐなといつてるとなりまたぐなといえなくなったツツジをまたぐ

「食べたものなど」

石川順一

露草に朝昼晩と水をやる露草は小さきままに伸び行き
お椀型豆腐に少しは惚れて居る日本の古墳を想起させるので
復元のページと文章桃ジュース足が勝手に動き出すかな
コロケかと思えばササミのフライかなキムチチャーハン昼餉に食べる
ウーロン茶冷やして飲めば夜の汗クーラーの付く寢室を恋う
肉巻きにブロッコリーが添えられてトマトスープとヒジキも食べる
唐辛子丸ごと食べて辛すぎる煎餅焼きで舌をととのえ
イワシ丼傍にクッキーの箱が有る徹夜明けの滋養分であつた

曇天の記憶

伊月杏

宵の頃 はじまりを告げる音ひとつ 響く藍色まだ夏の色
街灯と星の数ほど夢を見る 陽に灼かれてく、恋知らずとも
爪先に 言葉を載せる 音が乗る 時が生まれる 記憶重なる
歓声と拍手の渦に包まれて、瞬間、僕らは幻になる
天空に翔けた白金 曇り空 神にも見紛う鮮烈な記憶
あの夜を忘れないで生きてるうちは プラネタリウムは好きになれない
一對の瞳に燃ゆるアメジスト それを火種に生まれる感情
いつの日か隣の席で会いましょう 同じ景色を共にみましよう

抱いて揺れる

植田とうこ

初めての花束の色を覚えてるピンクのチューリップに赤いリボン
夕空にカンナの花が漂と燃ゆ風にひらめく消えないほむら
太陽の雫の輪切りは重なって君のために焼くレモンタルトを
永遠の緑を湛える針葉樹いくつの足音を聞いてきたの
温かな波打ち際の水色で胸を満たしてブルーハワイ
藍染のハンカチ並んで揺れていてあの人の爪に吹く南風
あまりにも綺麗な紫してるから中身を頬張り皮で描く巨峰
真っ白なレースの日傘が作る影あらゆる色を抱いて揺れる

屋上猿部9

宇祖田都子

屋上の錆びた手すりに絡みつくヘチマの水を採る細い管
犀を見た日はまだ青い柘榴の実ひっそり落とす中庭の池
セーブルの絵筆を折った先輩の彫刻刀のような眼差し
まっすぐに立たない笹へ先輩にもらった砂をさらさらかける
檄文 烏揚羽が屋上ヲ横切ル事ハ断固阻止セヨ
先生の煙草はキャメル先輩のスマホケースにナビブの写真
ひょうたんの形の池にひょうたんの形に育つ真鯉を放つ
屋上に降る雨のみを蓄えたヘチマの水で充たされる猿

ポケットに入れっぱなしの悔いがありい
つもより暴れる洗濯機

ほのふわり

いつもより洗濯機が揺れると原因を考えることがある
が、この歌の主体はポケットに悔いを入れたまま
だと思いつた。やってしまった悔いかやら
なかった悔いかは分からないが、その日のうちに心
の整理をつけられなかったのだろう。洗濯機が暴れ
るのを見て、主体は改めてその後悔の強さを認識す
る。上の句の促音や下の句の句跨りがガタガタと暴
れる洗濯機と心情をより一層際立たせている。

一首評

佐藤氷魚

動物園日和だねえとどこかから聞こえて
くれば子はうなずいて

御糸さち

どこかの誰かが言った「動物園日和だねえ」にうな
ずく子どもがかわいい！動物園へ行くのを楽しみに
していた気持ちや動物園を楽しんでいる様子がすご
く伝わる一首だなあと思いました。「どこかから聞こ
えてくれば」なのがまた良いなあ。子どもの動物園
に対する真剣さみたいなものがより強く伝わってく
る感じが良い。連作を読んで、久しぶりに動物園に
行きたくなりました。そしてわたしも「動物園日和
だねえ」って言う人になりたい。

一首評

西淳子

あたらしいあだ名がふえていくときの、
少しわたしが薄まる感じ

あき子

仮名に開いた「ふえていくときの」という措辞が絶
妙で思わず頬をゆるめてしまう。この歌、好きです
と告白したくなったりする。柔らかな感情の動き、
ゆっくり増えていったのかなと思わせる句跨りと平
仮名効果、率直な歌いぶりなのに、仮名と漢字の使
い分け、読点を使ってひと息つかせるところなど、
技巧派だなと感心したくなったりする。言いさしの
ようでも体言止めでもあるようなやさしい歌の閉じ
方も。やっぱりこの歌、好きです。

一首評

雀來豆

真新しいチョークの角が粉になり校舎の
脇にユキヤナギ咲く

佐藤氷魚

テーマ詠「新」。あえて初句で字余りにして「真新しい」
と表現することで読者のイメージを一定のものにし
ている。しかも白を思わせるから不思議だ。初めて
使うチョークは、黒板の上を滑るというより、黒板
の上で砕けるという感覚である。すると粉が舞う。
チョークが真新しいことから、四月に咲いたユキヤ
ナギなのだろう。新学期の教師か児童生徒かが握っ
たチョーク。ホワイトボードや電子黒板に移行し切っ
ていない教室に趣がある。

一首評

高橋良



一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

六連の蛍光灯の遅しさ烏龍茶にもビタミンがある

廻れ井戸

連作の導入歌として、とてもインパクトがあった。蛍光灯は図々しい光だが、その遅しさをウーロン茶缶の酸化防止用のビタミンCと並べる。その食品としての健康的作用は、目的に添っていない付加的で副次的な作用だ。また、蛍光灯の本質は無粋な照射。その中に副作用的に現れる遅しさ。それは、鳳のような友の一種ずぼらな性格に副次的に付加された見かけの遅しさなのだろう。鳳とはそんな鳥なのか、最後の鳳凰の落ちが楽しい。

一首評

大坪命樹

「ねえAlexa、音楽をかけて。祝福をして。存在のすべてを賭けて」

君村類

連作から切り離して鑑賞する。二つの読みが考えられる。①として〈無茶振り〉。音楽、祝福、これらをただ行うだけでなく「存在」を振り絞れと命じる。②は、下句全体が3つ目の要求である場合。元々Alexaは命令遂行機械ではない。究極、押せば鳴るボタンと一緒。なのに「自分のレゾナードルを、すべてを賭けて証明せよ」と主人公は平然と言う。機械への要求の範疇を超えている。Alexaの脂汗が、目に見えるようだ。

一首評

中村成志

ここにいて、どこにもいかないで、ねこよ、花降る春の光のなかに

嶋田さくらこ

愛猫との別れを詠った連作「猫を看取る春」の一首。身近な存在を亡くした経験を重ねると、三つの句点がある上句は別れの鳴咽と想像する。悲しくて悲しくてどうしようもない。けれども逝った魂が花、春光という温かさを守られてくれたら、という詠み手の想いも下句に横たわる。喪失の穴を埋めようとすることは創作の力になり、その逆もまた然り。その作業のプロセスで心は自分を鎮めるものを得ていくのだろう。

一首評

杜野詩季

夏、平行四辺形に酔うバスケットゴールの黒い影がゆらめき

雀來豆

太陽の照り返しが激しい真夏の屋下がり。そこから逃れるように無人の体育館に入ると、たちまち目が眩んでしまう。むせ返るような熱気に覆われるやいなや、外の喧騒は遠のいてゆく。やがて屋内の暗さに目が慣れてくると、遠くから微かに金属バットや吹奏楽の音が聞こえてきて、そうしてわたし自身が取り戻されてゆくような、そんな感覚が押し寄せてくる。「平行四辺形に酔う」という大胆な把握による臨場感に、夏の一場面が輝いた。

一首評

五十子尚夏

スカートを買う スカートはどうしても風のかたちを覚えられない

ほのふわり

買ったばかりの新しいスカート。勿論、主体は気に入っている筈だ。風が吹けば、スカートは揺れるもの。だが主体は、そのことには小さな不満や不安を抱えているようだ。スカートに風のかたちを覚えさせることなど、もともと出来はしないのに。もしかしたら〈かたちを覚え〉てしまうことの不自由さや空虚さが、逆説的に詠われているのかもしれない。希望と不安が入り交じった、新生活の匂いが漂う。

一首評

西鎮

青空

泳二

午後の径

小崎 ひろ子

青空の写真を送るこんなにも何もない六月をシェアする
悲しさを処理する手順ひとつさえかなしいほどにぼくらは違う
聞かなくていいことを聞く帰り道背中にシャツがひどくはりつく
おぎなりに返事をすればため息のようにLINEの文字が途切れる
助手席のにおいを僕は知っていて横顔と笑い声も知ってる
泣き顔を二回しか見たことがない泣いてたことはきつとあるけど
コーヒーが出来上がるのを待つ間会いたいと打つのをがまんした
それぞれの空で僕らはつながって雨を降らせて暑いねと言う

東京たわん

大坪命樹

半蔵門いづこかあらん高速より降りて来たれば表参道
窓の外れいわが演説過ぎ行けば吾妹と歩きし櫛並木ぞ
カーナビが親切むだに迷ひ入り等しき道を数度ぐるぐる
ホテル着き近くのスイーツ探し歩く 棒に当たれど負けまじき犬
店員に訊けば四階薔薇の庭 東京ガーデンプレイスが空
ケーキ好きの吾妹が舌ぞ痺れさするピスタチオマカロン 東京かな
帰郷日に神田古本観に行きき されど月曜休店多し
古本屋記念にいくらか買ひ漁る 貴重なる書の御縁を思ふ

血脈

梶原一人

横向きに手足のばして眠る吾はやく走れぬ人の端くれ
馬のひづめ削る仕事の小気味よさ真似て皮剥くにんじんじゃがいも
父がみる競馬に吾は興味なくユニコーン駆る妄想を視ゆ
熱中症警戒アラート出でたる日まひる無言の馬走らさず
よそ者のジョー跨りしかの馬も名はありけんや 炎天の綱
襲歩とはいかなる由来か思いつつ冷えたる桃にフォークつき刺す
実況の声が激しく連呼せる馬はけっきよく一位にならず
気がつけば辺りだれもが敗者であり気づかぬうちに勝者去りたり

青馬の歩み気高く行く人は白梅鼠の髪を揺らして
 棘のある言葉で殷紅色に染め、あなたが奪うための唇
 無垢なふりして守られていた雨に乙女椿の深い花びら
 鶺鴒に身を包まれて人知らぬ野を飛ぶ鳥と街を歩こう
 前栽の松よ、華などなくてよいものなら、かざせ常磐緑を
 艶添えて傾ぐ芸妓の身に纏う布は新橋色と清かに
 藍鉄のネイルが痛いそんなにも腕をつかんで何かあったの？
 夕立にあったのだろう髪は濡羽色のつばさ抱きしめている

渡る

がね

景色から景色へ渡る東京も千葉も日射しは同じ強さで
 昨晩の仕事の記憶ぐるぐるとPowerPoint自在に回る
 同じ駅に環状線が止まるのが少し怖くて少し優しい
 パソコンとスマートフォンとタブレット どれもひかたってどれもわたくし
 影当てが得意な部下に落ち込んでいますかと言われて止まる
 終点へ着けばそこからバスが出てバスを降りればまた道がある
 同じパーツ同じ筋肉同じ日の笑顔が違うことがたましい
 あ、死ぬと思っただけはあ、死ぬと思わないまま生き続けている

潮風にひうかれて白

かうすまゐ

首元に銀河のひかりを常に持つひとと歩いてまわりたい場所
 Guten Morgen あらゆる祈り 目が覚めた時刻を朝と定めて生きる
 ゲマインシャフト・ゲゼルシャフトを追いかけて過ぎた季節の街を通つて
 はじまりの心で巡るキャンパスがずっとわたしの夢にあること
 遠海を透かしたように性愛をけして語らぬひとだあなたは
 淡水のように瞬きするばかり笑い話のない世界では
 夜明け わたしを撫でてくれた手が気泡になっていくだったのだ
 海風にちらばる白の正しさにひうかれていくわたしを見てて

東中野は

涸れ井戸

ラインにて赤ちゃん写真唐突に送られてきて愕然とする
 抱っこしにきたら？と言われ東京へ新幹線でのこのこと行く
 夕方の東中野は防疫の無料検査のコールかしまし
 カンテラの道まで来てと電話あり銀座通りをあたふた探す
 乳母車押して役者は背を張って貫禄のある母の顔する
 新宿のネオンが見えるアパートで泣き止まぬ子を上下に揺らす
 足裏でばすばす蹴られこの圧を死ぬまで忘れないって思う
 ゆりかごが三台もあり「これ全部役者仲間がくれた」とのこと

色情魔！色情魔！と叫び続ける叔父のインコを窓から放つ

無自覚にあなたもおれも傷つけて緋色い町に吹く排気ガス

CMの斎藤佑樹が隠し持つ夕日の色を染めたハンカチ

信号に鴉とまれり四つめの色は黒だと言わんばかりに

レモンしぼればレモン色に染まるリーフが乾ききればレモンティー

七色の夢に魅せられ一生のしごとをrainbow chaserとする

色々をカラーカラーと読むだけで笑える夜がこんなにも来る

「はだいろ」と呼ばれた日々を思い出したまに泣いてるパールオレンジ

都会ってどんな場所なの 雨の日の夜空に滲む赤しか知らない

何色のインクを入れて字を書けば日記の中に残るのだろう

でもわざと補色で影を塗っている灰色の空を見たくないから

カラフルな惣菜並ぶデパートの地下1階で買ふいなり寿司

誰にもなれないんじゃない日スケルトンから涙になった

◆ 深山睦美

◆ 虫武一俊

◆ 六浦筆の助

◆ 六厥めれう

◆ 村田一広

◆ 森内詩紋

◆ 杜崎ひうく

◆ 杜野詩季

◆ 矢野目桂桂

◆ ゆや ゆき

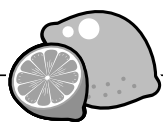
◆ ゆりこ

◆ 龍翔

◆ れいあむ



テーマ詠 「色」



R G Bを重ねて記憶とはいつか白へと還るまぼろし
 一滴で澄んだ紅茶を濁らせる罪なきミルクの罪なき白さ
 ブルセラの店の跡地の再開発はビルも道路も不確かな色
 クレヨンで描いた白いアジサイを引き立たせてゆく水色の雨
 確実に花は咲くからじわじわと色づいていけ日本列島
 虹色にかがやく君の声聞けば紫陽花笑い僕は涙す
 頬にさす色で年齢気付かされ着ている服も着替えたりする
 空色を作りたいのに出来たのは昨日別れた彼の色です
 太陽の光が赤じやないように「愛している」はしっくりこない
 その色の未来を選ぶようにして子どもたちが手に取るランドセル
 そうだった私は赤いランドセル渡され笑っていた 春だった
 それぞれがあらゆる言葉で傷つけたから虹色に輝るキリスト
 淀川も神崎川も緑・白・黒・黄・茶で表現できる
 黒色の犬の毛並みに白色が増え十七の年月おもう
 虹の色なただけでは足りなくておもちゃの宝石箱をあける

- ◆ 早月くう
- ◆ 雛河麦
- ◆ 廣珍堂
- ◆ 飛和
- ◆ 福山桃歌
- ◆ 細川エリカ
- ◆ 真岡まな
- ◆ まさけ
- ◆ 真瑠
- ◆ 丸瀬まる
- ◆ 御糸さち
- ◆ 深影コトハ
- ◆ 水沼朔太郎
- ◆ 南野ひさ奈
- ◆ 水也

数学は嫌いだった

河岸景都

何もないものに何かをかけていく空洞だけを味方としていた
 遠い夢見れば見るほど動けない反比例するからだところ
 また少し違う記号を置いてみて正しくなさを作る僕たち
 飛んでゆく鳥へ伸ばす指の隙間、景色を区切る鋭角を知る
 証明を終えれば楽になれるのか問を立てても証明が無い
 次に会うときにはきつと君が知る方程式を僕に教えて
 数学は嫌いだったね、曖昧なものばかり見て安心をする
 確率を求めなくても大丈夫もう二人とも生きてゆくから

わかるよ

氷谷雪

なんとなく目覚めればまだ不安げなパウダールームみたいな朝だ
 豆乳の白ではない白注ぎつつ知らない国の惨劇を観る
 開襟のシャツから喉笛覗かせて敵ではないこと示す女子アナ
 dボタンから参加して多数派に属することだけ期待する、赤
 いま暇？と問われて困る大量のブラジャーなどを手洗いしてる
 ドーナツの穴なのだろう旧姓に戻った友が失くしたものは
 晒し合うほど子供じゃないコーヒーに沈んだ氷は存在しない
 暮れなずむ時によりやく曖昧を許せる気がして「わかるよ」と言う

人間にうまれたくなかった

君村類

死んでいく人間としてあちこちのサステナブルの文字を見ている
 時間貸し駐車場よりアパートのほうが重くて土地は嫌そう
 根無し草 美しく咲く雑草のすべてが与えられた名前だ
 輪廻とか転生とかを疑ってペットボトルはりサイクルに出す
 大切なことを小声で話したい世界で今日も重機の咆哮
 結局はわかり合えない 飲み物の色を透かしたウォーターボトル
 真向かいのアパートが影を作るのに根暗の役は続投のまま
 将来の墓所の持続を考慮して骨は遺さず死んでください

五歳のものさし

きょんひめ

うちの子もゲーム機よりも最新のスマホゲームにひねもす夢中
 ロウソクをつけてハピバを子は歌い電気つければ「もっかい！」と泣く
 風そよぐ川辺の屋におにぎりを逃げ出す蟹とシェアしたい子
 沢蟹と戯れるうち令和の子は弁当箱の空に放り込む
 進撃の巨人のカード、ガムつきだ！ギリギリ知ってるキャラのタぐれ
 雁うたい空を見ぐるおさなごは「ママ、さつきへんなつがいの声！」
 森陰に雪珈がいるよと子に言へば、ヒッヒッヒッヒと吾はせっかに
 シルバニア家族は待ちし子の帰宅 コロナ長引きまにまに五歳に

真夜中に地面に穴を掘るような音が聞こえたあとの静けさ
二度三度来た縁談を断れば今も過疎化が進むふるさと
強すぎる雨に混じって湧いてくる消されたはずの森の気配が
いつもよりずいぶん早く梅雨は明けいったんそれを受け入れてみる
街に吹く風を乱して廃校のオルガンたちの狂った校歌
海面が上昇すると富士山も低くなるから覚えなくても
隠された開いの中を疑わず誘導されて迂回路をゆく
そんなことないよと順に言い合って一周したら疎遠になろう

息をした理由

古都 梨衣子

僕は終わる君も終わる僕がいたこと息をする理由
深呼吸すーはーすーはースーパーで片手にりんご熟せ熟せ
夜行バス息を飲むこと躊躇って呼吸ができなくなったら愛して
そろおりと息を潜めたあの夜に溶かしたチョコは甘くなかった
色になるはずだった思いかき集め画用紙に吐くため息の色
側溝に流れてる夢、祈りましょう、消化した本音だったとしても
ある日の午後たしかに君はそこに居て瞬きもせず笑って泣いた
必死に生きてみたって僕達は大人になればどうせ絶望を知る

熱帯夜

佐藤水魚

たそがれの跨線橋から思い出の先客として浮かぶ織月
世の中の通知を全部せき止めて飛び交う星の話をしたね
空調と犬の寝息の聞こえる部屋でわたしを聞いている月
竹富は島ではなくて星でしようあんなに渚に星屑散って
火曜日の夕暮れの窓を開け放ちしあさってまで燃やしてみたい
教科書を走るメロスの行く末に蛍光ペンで月を描いた
南極の水が全部溶けそうな夜にもきみはホットコーヒー
あの夢の視線が合図 星の降る夜にレースの日傘をさして

この朝を塞ぎ止めてゆく遮断機の黒に黄色がやけに明るい

あらかじめあかねむらさきあいきはだ失はれたるいにしへのいろ

始まりを告げる少女の灯火に触れて目覚める紅の薔薇

りんご^{あか}紅れもん黄色のその中にまっくらがりがあると知らず

猫たちは夢をみているそれぞれに地球と同じ瞳のいろで

色の名を覚えしわが子われ好む色は抹茶と覚えたりけり

一色は滅びその後の群雄も滅び轟く丹後の海よ

爽やかに終えたくなくて逢えた日の手帳をミントブルーで飾る

多幸症静かに進み紫陽花は薔薇色を帯びながら枯れゆく

出番なきペールオレンジきみは夏を吸い込み日毎濃くなってゆく

ひどい手荒れ 裏切るためにあざやかな宇宙の色に爪をしたてる

さようなら藍と^{はなだ}縹を分けられた頃の私の逢魔が刻よ

和を以て貴しと茄子（むらさきはいちばんえらい色ですもんね）

さみどりのメロンソーダのグラス越しきみの左手、エイリアンみたい

桃色のキリンを飼いたいサバンナの夕焼け空に似た色をした

◆ 西 鎮

◆ 雀 來 豆

◆ 白 石 夜 花

◆ た え な か す ず

◆ 高 田 月 光

◆ 高 橋 良

◆ 田 中 翠 香

◆ 千 原 こ は ぎ

◆ 月 硝 子

◆ と も え 夕 夏

◆ 中 村 育

◆ 中 村 成 志

◆ 西 淳 子

◆ 西 村 曜

◆ 薄 荷。



「色」 テーマ詠



もう着ない色ばかりだ17アイス自販機遠巻きに見る
いつまでも忘れ去らずに心深く野に放たれて咲く堇色
もしかして雨が終わったあともかね色の空気を吸い込む三時
白杖をコキコキ畳み利き腕を我が肩に置く人と元町
少女から目を逸らせずに恋をした真珠の白が目蓋に爆ぜる
色十色あわせて混ぜてパレット colour 彩る先は白の画用紙
だまされたほうがわるいとおもいます ワンピースの裾ひるがえり白
月かげにセピア色の車止めは MALICE MIZER のやうな影もつ
初期ポケモン選ぶくらいの真面目さでクリームソーダの色を決めてる
カラフルな金平糖を一つ一つそおと包む大きな君の手
茹でたての海老にアスパラ、とうきびも死にたての色はご馳走の色
プリントにオレンジペンで書いた文字は見つけなくてもいいよ（見つけて）
オレンジの朝が訪れカーテンのペールブルーに夜を預ける
テーブルを挟む向こうで気色ばむ劈開しないバウムクーヘン
スピードの女王の持てる黄の花を喰みてをみなの王道をゆく

- ◆ 音平まど
- ◆ 歌島孟
- ◆ かうすまゐ
- ◆ 涸れ井戸
- ◆ 河岸景都
- ◆ 北村美晴
- ◆ 君村類
- ◆ きょんひめ
- ◆ 小泉キオ
- ◆ 古都 梨衣子
- ◆ 咲兵衛
- ◆ 佐藤 砦
- ◆ 佐藤水魚
- ◆ 汐射ハルカ
- ◆ 紫苑

納涼飲料水

汐射ハルカ

夏は朝

雀来豆

曇天を割り裂くような轟きと雷雨よびこむスターマインと
溢れ出す気持ち言葉を言葉にしくなくても赤や黄色や息遣いだけ
侘しさは古い借家に咲いている置き配の花そば降る雨に
いつか死ぬそんな不穏を打ち消して小さな嘘をまた重ねてる
のどごしがあまりよくない飲料水まだ夏は来ずまだ果ては来ず
お互いのアカウントとか知ってても覗き見もせずフォローもしない
押してみるまた引いてみる顔色を思わせぶりな誘導尋問
会いたさは降り積もるけど散り菊の花弁のように消えてしまうな

ドアスコープ

西鎮

鳶色の瞳にうつる青空をきりわけてゆく地対空弾
茶碗蒸しにじっと沈んだぎんなんを掬えば抉れた痕までまるい
炭酸の抜けたビールを捨てているシンクも海へつながっている
ドアスコープごしに覗いた恐ろしく明るい世界を下着姿で
チーバくんは犬ではないし懐かしいひとを待つにはひろい西口
シベリヤをひとつ購う 祖父たちを獄へ運んだ夜更けの列車
自転車朝霧へ漕ぎだしてゆく溺れるならばきみがよかった
六月の交わされなかったくちづけを集めたように咲くガーデニア

Raincoat

白石 夜花

雨粒が窓を叩いて呼んでいるワタシの気持ち察したように
生ぬるい砂糖まみれの珈琲を半分飲んで苦い顔する
赤色のレインコートに身を包み青に溺れた街を彷徨う
土曜日の午後二時半の駅前に見慣れたキミの姿はなくて
雨女だから出会いも雨だったそれでもキミは笑っていたね
雨女だから別れも雨だった泣くにはちようどいい天気だね
仄暗い空を見上げて滲ませたキミはまた言う「いつか晴れるさ」
そんな日は来るのでしょうか本当に独りぼっちじゃもう待てないよ

和民にて

寿司村マイク

爽やかに白い歯見せてちゃん付けの初見の男の鼻を覚える
いい嫁になりそうだねと言われてもお前の嫁には絶対ならん
モテるでしょ彼氏はいろの？に恋人がいるよと返す　そこに気づけよ
付き合ってたほしかったのに。　ごめんねと返して謝罪鳥の飛び立つ
あたし以外ゆかりもあやもえな・まふゆ　みんな・飲んでますからWow Wow
街なかの路傍の石はひそやかに　管巻く和民はワイワイガヤガヤ
コンドーム使わないよ。に勘違いしてる間抜けなY　そうじゃない
アパートに帰り着信　iPhoneの向うのきみはゆるふわパーマ

推定有罪

たえなかすず

真実は不明であるが恋人は優しい女と推定される
恋したい、もったいぶって言ってたね　とぎれとぎれで君らしかった
Tシャツを丸めて遠く投げ捨てた放物線に残る薄青
ぶら、んこ、と無意識に僕は漕ぎ出して別れ話を受け取る合図
むせかえる新緑の陰　有罪になっても君は僕の花だよ
原宿で、タワーでやがて劇的に出会うのだろうしばし別れて
ひとり来てひとり出てゆきこの夏に思い出という罪が残った
戻り梅雨　一度くらいは駆け足で傘も差さずに会いに来てくれ

彼女は不機嫌

多香子

真四角な段ボールにも詰められる猫というもののフレキシビリティ
面白くない編柄の猫がいて一同無事だが面白くもない
平和なる鳩と思いついて育てたが鷹の増えゆく不穏なるこの世
あなたには会えない夏の休みでも快速電車で私は通勤
キッチンシンクやみくも磨いても手が痛いだけ　外は雨降り
まな裏に逆さにのこる蟹気楼　あの夏の恋のひどい結末
この夏の暑さにゆがむ昼顔の微熱のような私のひたい
まただれか噂してるとくしゃみする　見ていた猫も隣でくしゃみ

玄関の戸

高橋良

トタン屋根の小屋は倉庫となりけり使ふ者なき農具残りぬ
玄関の戸に鍵かけぬ地区に住み当然のごとく春の戸が開く
函館のあをき教会描きけり青函トンネル鈍行のころ
茶筆筥の奥にしまへるぶだう酒は子の生まれ年に作られし赤
公園へ娘と行けば鉄棒もぶらんこもする大人となりぬ
奥羽線速度ゆるめて走りゆく二の丸跡のお堀の花見
出羽の国に生まれしわが子ひさかたの天使のごとき笑まひたふる
幼子とバスに並みぬて咲き初めしみちのくの桜指さし眺む

テーマ詠「色」



「あなたの」は「わたしの」だからかけすぎているいろめがねを外していく
都会には色んな光が混ざってて、白熱灯もうっすら濁る
七変化^{アジサイ}の青を求める試験管どの薬品が応えてくれる？
やはらかく足を揺らして夏色の平均台のまんなかで待つ
夕間近、手をつけてない弁当の橙色の付箋紙を噛む
TikTokに揺れるひまわり　黄とはたましいの翳りに添う差し色か
木に水をかける約束守ったら木は水色に塗りつぶれてた
しゃぼん玉紙風船やかざぐるまビー玉の色彩に涼しさを見る
飴色の瞳に午後の光が透け甘そうだから落とす口づけ
カリヨンの奏す賛美歌定刻の隊列を成す黒き僧上
固く張り詰めたさみしさそのものをかじればこんな李の黄色
紫陽花のように心の色が揺れ傘の下からそれを見送る
福寿草モダンアートか原色の花と幾何学模様の葉々と
あてどなく白い飛翔に招かれてかげ黒々と空にかさなる
涸れた暗渠に青き子猫は走り込みくろぐろとした虚^{うつろ}を残した

- ◆ あき子
- ◆ 麻数
- ◆ 麻倉ゆえ
- ◆ 有村桔梗
- ◆ 歩歩
- ◆ 五十子尚夏
- ◆ 池田竜男
- ◆ 石川順一
- ◆ 植田とうこ
- ◆ 宇祖田都子
- ◆ 泳二
- ◆ 大坪命樹
- ◆ 岡田濫
- ◆ 小崎 ひろ子

ブルボンのある暮うし

ゆりこ

ねえ見てと真剣な顔でルーベラを葉巻のように予らは啜える
シルバーヌ並べていればシングルの友との会話に微妙な隙間
先輩の離婚を知った春の日もバームロールの色は優しい
アルフォートの青がまぶしい切なさを船尾へ放てば泡立っている
後悔を重ねたようなルマンドを食べればこぼれる星砂に似て
役割をチョコリエールの舟に乗せ流してしまいたい夜夜中
聞くことに疲れてしまうロアンヌを割っている夜の片割れの月
白と茶を交互に食べるエリーゼのためにではなくあなたのために

完全変態

龍翔

暑いから仕事をしたくないと言ふひとのわれよりおほきボーナス
十五分ごとに聞こえる溜め息でどんどん錆びてゆくトタン屋根
笑ひ声を耳のうしろで聞きながら今日の記録を仕上げてしまふ
夏の日の雲ひとつなき青空に古き上司を虫干ししたし
そろそろと席を外して連れ立つて樹液を吸ひにゆくをとこたち
常勤で良かったですね ひび割れたアスファルトから草生えてある
全体をブルーシートで覆はれたマンションがいま羽化するところ
われはもう夢見る蛹ではなくて完全変態した非常勤

夏の色たち in 幕張

田中翠香

白と青ただそれだけで塗り分けて空にそびえる雲の奇峰よ
少しでも白を交えて薄青く光るかち割り氷よ空よ
白と黒二色で満ちるホーム側外野席とは隅の城だ
黒土と緑の芝生の鮮烈なグラウンドへと白南風が吹く
こんがりとした肌は気づけば小麦色ビールの金の光を受けて
青と蒼空と海とを分けあって幕張という優しい世界
その空が紫色に染まる頃赤い夕陽が彼方に沈む
赤と黄と白と緑と……幕張の夜はふたたび華やいでゆく

鮮やかなまま

千原こはぎ

今朝もまた窓越しに見る駅までを足早に行く見慣れた背中
きみを見た日と見ない日と 伸ばしても届かない手に溜まるため息
駅までをふたりで歩いていた日々のわたしの位置はそうあのあたり
取り戻せないと知ってる飲み干した水はコップを乾かすばかり
いらっしやいませを繰り返す屋下がりきみに似た手の甲を見つける
今日は目が腫れて髪もうねってきみが来なくてよかった 夕立
後悔がとぼんざぶんと打ち寄せる夜更けうるさくても眠りたい
記憶ごと消せたらいいな七月を鮮やかなまま受け取りたくて

CYMB

れいあむ

斜光つきカーテンが阻む朝の陽をぼくはこの手で切り拓いてく
初恋の味も知らぬままだから朝露の中茱萸の実を食む
かぎろいに抱かれたまま昼寝刻みどりの四葩につむり這う這う
ジャスミンの遠き香りが雨めいてブランコゆれて青に吸われる
がさがさとビニールを持ってやってくる橙色の夕焼けと酒
夜に冷えてあさきまどろみ白む空ブルーライトの痛みを抱いて
黒という色の呼び名の多い地に来てまで想うきみはカラフル
カラフルなものばっかりのこの世界真っ白なのはここかアタマか

合歓木

和田晴美

良い話ばかりするには体力が要る 合歓木はほんのり赤い
手を取れば力を込めて立ち上がるお迎えまだと嘆いた後も
頷いて聞くだけの事がしてやれず寂しかったろうか母さんも
働けとスケジュールアプリに促され立ち上がる利他の心で少し
手について四つん這いなら転ばぬとカートまで行く矜恃を目守る
生きていて今日もかなしい私たちが会いたい人への道のりを行く
夏増量効果は確か蚊取り線香ベランダも故郷と変わらない
実はねと打ち明けられて何度でも頷きながら聴く同じ話

インキュバス菓子店

月硝子

人間を日毎夜毎に太らせて己れは痩せてゆくシュトーレン
おおかたの話題も尽きた巣籠もりの真昼煎餅ばかりが響く
赤福を分ける木べらに漉し餡の月無き宵の色まといつく
エルニーニョその汗ばんだ掌の中で溶ける地球というボールチョコ
裏切りの意味を初めて関西のしょっぱい雛あられから学ぶ
君という時はおとなでいたいのにパンケーキはまた蜜に溺れる
ひたすらに危険な色の駄菓子買う子は紅い実に酔う鳥に似て
甘いもの求めてやまぬ迷い子に四肢開くインキュバス菓子店

くろわさん、演劇部に入る

ともえ夕夏

語彙のなさを隠さぬままにあの沼をただ尊いと言へる水無月
あめんぼはあかくはなくて白秋の歌延々と語じられる
才能のひとつでせうね轟けるおほきなこゑは生まれつきです
叩き場にナグリをさげてゆくきみの仲間全員創世主めく
少年の役ができると言はれたる背丈のちさきみかかやけり
芝居とは遊び あそびを見つたるきみいきいとをさなのやうに
ゆふぐれの魔術師といふ二ツ名を照明係が受け継いでゆく
無観客公演 夏のさびしさを拭へばあをきボカリスエット

こんなにも早く梅雨の明けた
2022年初夏

中村成志

コーランの日本語訳を読むまひる日本語訳のコーランでなく
朝まだき街の唸りのまだ遠く梅雨の前にも鳴く虫はいる
梅の木の新緑の元にひざまづき猫に額はあるものなのか
陽光が嫌な日もある心臓の上に頭を置く種であれば
桜枝たつぷりと葉をしならせて速いな雲が、陽の満ち引きが
幾層にうごめく雲よ散る 萎む 枯れる 腐るを選べず花は
蒸し終えて箸で開けば玉ねぎに芯有りまろくつややかな湯気
狼と鯨の恋の物語繋ぐためにも雨降りしきれ

ma non troppo

奈瑠太

じゃあまたねあなたと遊ぶひと月で夏を迎えるまた来年ね
もう触れぬ誓いを立てて永遠を掴みなかった水仙の花
描かれたきみのドラマを演じてる満ちた午後から降りたくないよ
あまやかで、でもともだちの切なさを苦みに解いてのむアマレット
いのちの火触れたくなってひりひりと蒸散させるわたしの野性
ここからは入っちゃだめと言いつつ花は摘むのね、二幕芝居
生きてればまた会えるって甘えてた、きみ思う時ひらく小説
悲しみと平常心はポリリズム スライドしたらピュアだけがある

雷神が遊びに来てる

村田一広

ふりむかないふりむかないよ耳のうしろには菜の花に満ちた春
雷神が遊びに来てる縫ひ針を動かすたびにビクツと痺れ
真つ白な顔して夏は現れるソフトクリームと入道雲
夏の海の尖端が足早にきてサンダルをぐるぐるまきにする
開いたままのドア 真つ暗な奈落 永久に点検のエレベーター
コーヒーになる前のコーヒー豆をカップに満たし香るサンプル
いつしらの日付は変はり帰る場所も行く場所もなき街をさまよふ
夜の成分が詰まつてゐるところ真夜中と呼び息せず過ごす

イーハトーヴの夏

森内詩紋

公会堂灼けてその壁白茶けて熊の胆のごと苦き暑さよ
半袖を風通り抜け Zypressen 揺らして過ぎるヒト多き街
冷房の診察室で我が胸のラッセル音に医師は微笑む
盆までを生き延びるための錠剤は蟹の子の吐く泡に似ており
早咲きの真つ赤なダリヤ美しき その高慢も夏の彩り
城跡にカッコウ鳴き交わして絶えず 毘沙門橋を独り渡れば
送り梅雨聞こえぬ声をしんと聴く 私の中の竜と詩人が
「ほんとうのさいわい」探せ この夏もイーハトーヴは全天に星

6月はペンギンまつり2022

西淳子

ペンギンは真珠泥棒見習いで鉛玉ばかり盗んでしまう
近所にもあればいいなと思ひ撮るペンギン注意の道路標識
ペンギンがうごくたんびに擬音語がうまれる 耳をすましてごらん
清水の舞台から飛び降りた最初の人のあだ名がファーストペンギン
ペンギンとセックスすればペンギンの唾をあなたは飲み込むだろう
鰯雲がゆっくり逃げるのを追いかけるるくるくるる風見ペンギン
多部末華子も休みの日にはペンギンのTシャツとかを着るのだろうか
ペンギンが光を追いかけることを希望と呼んだ 六月の希望

ふたりの家

西村曜

目的のないケーキこそおいしくて「生まれてこないほうがよかった」？
約束と花束どっちをくれたっていいよ破ってばらして捨てる
ドライヤー人にすんのはこわいよね相手は生き物だってわかって
老いてわたし、あなたをきくと困らせるどうかしんそこ困っておくれ
冷めているホットケーキをあたためて生きているのはこれがはじめて
しあわせになるでもするでもなくここにあなたがいると朝焼けだから
くじけない。クリームソーダはさくらんぼのせてはじめてクリームソーダ
家という字がやまいだれであつたなら、いや、あるようなここはふたりの家

こつこのお引越し

杜野詩季

横断のご婦人を見てあこがれがため息になる車椅子の母
達筆で読めない葉書伯父さんは多分訊いてる「こつこ元氣か」
「新しいところに移る」大福を差し入れ禁止と言われた母は
キッチンとお風呂は不要優しい手が標準装備の施設探^{物件}し
三年の時間が積もる物は皆捨てるなという顔つきでいる
思い出と不服を抱え部屋を出る世話になったと頭を下げて
引越しの破茶滅茶ながめ微笑んで父は落ち着く備品の棚に
できないと決めつけないこと新しい生き方はある幾つになっても

頷くだけ

ゆや ゆき

魔法使みたいで顔でペンを振り天を仰ぐも何も浮かばず
紫陽花は急に膨らみ本当に言いたいことはそれじゃなかった
ぼんやりと霧がかかって何もかもつまらないのはお前のせいだ
だとしたら何だと言うの朝焼けは無垢を装い夜を燃やして
公園の水飲み場では子鴉が水浴びをして輝いていた
このままじゃ良くないことは分かっている風の強さに委ねたくなる
君はただ頷くだけで ああそうか ポプラの綿毛地上から降る
何でもないふりをしながら生きている四季咲きの薔薇次々と咲く

4 top 4

深山睦美

判断が速いなあ！じゃあ君のこと、今日から「判断」と呼んでいいから
 リムジンの窓をバットで割っていく あなたに風を感じてほしくて
 ワザップに確かに載っていたはずのあの日誰かが起こした奇跡
 フライデー・ナイト・フィーバー 死にそうな時こそ不敵に踊るしかない
 誰だろう、目隠しなんかする人は お茶目だなあと思いながら死ぬ
 「まだ島に人が残ってるんです」と誰も言わずに船は出ていく
 除草剤を今年も撒いた もういないあなたをわらう人に向かつて
 勝ちか負けかで言えば勝ちなのだろう僕らがそう信じている間は

ローカルルール

虫武一俊

セルフ・プロデュースなど難しく築古のマンションに棲む鼻炎のおとこ
 行きたくない場所に通ってやりたくないことをしている生活なれば
 泡ほどの軽さの金を積み立ててなんらかの夢を見せる国策
 飛沫がかった街の眩しさ清掃を終えて冷却塔を出たとき
 折り畳みベッドを広げ書庫に寝るローカルルールに今日も溺れて
 からっぽの箱をひっくり返してはなんにも出てこないという儀式
 ありふれた表現言語しか持たずけれどもおれにおれの詩がある
 髪型をパイナップルに逆立てて今夜あなたを笑わせている

あひるかくし

ネコノカナエ

そのむかし（それは去年の体育祭）あひる探しがありませんたとき
 探されるためには隠す人がいて実行委員の手の中で鳴る
 背を押せばふうと応えてあひるたちひとつたつと隠されてゆく
 あひるあひる隠されゆけばふわふわと校舎は四階建ての大池
 あひるあひる（時々ゾウや子ぶたとか）いろとりどりのさあ隠れんぼ
 もういいかい まあだまだまだ始業前まあだまだまだ開会前の
 あひるあひる隠され場所は捕まえる手が来るまでは秘密のなかの
 あひるあひるみつめてごらん桃色も黄色も青もどこかに潜む

夏の真ん中

薄荷。

噓せ返る草の香りに包まれて夏の真ん中みたいな公園
 蝉たちの歌う声と街路樹のみどりも夏の暑さに滲む
 まっすぐに山の上まで手を伸ばすひまわりは風を掴もうとする
 ハッパ飴きりと囁んだ吐く息で入道雲を生みだしている
 昨日見た入道雲も飲み込んでカルピスソーダの潔い白
 ベースボールキャップは青くよく晴れた空の光と同じ煌めき
 青空にびりりと走ったひび割れをなぞっていくように飛行機が飛ぶ
 無造作に額の汗を手で拭い少年は夏の真ん中に立つ

「昭和歌謡」短歌ヒットパレード

六浦筆の助

くたくたのマスクの縁の口紅は君が残した「ゆうべの秘密」
 江ノ島に泳ぐ乙女の戻り来て二年振りなる「恋のバカンス」
 妹の代わりのシヤム猫「チツチ」囁む私の「小指の想い出」遙か
 一年間メール重ねてデートしてはじけて消えた「水色の恋」
 シフト組むサブリーダーとなる俺の欠員だらけの「銀色の道」
 離婚した父と母にも煌めいた「二人の銀座」はあったんだろう
 展覧会付き添う君が眠たげに見る原宿は「浮世絵の街」
 四条から鴨川沿いを北山へ「京都の恋」の欠片拾って

ホテルロイヤル

六厥めれう

橋ひとつ渡れば行けてしまうから島と呼ぶには大げさすぎて
 横揺れに備えて足を踏ん張れば縦に揺さぶられるモノレール
 天王寺アイルの駅は首都高を見下ろす位置にあるお得感
 週のうち四日も休むカフェありてロビーの隅へ影を造りぬ
 検索の「第一ホテルロイヤル」に続けて提案される「閉館」
 部屋にある「支配人へ」の手紙には書ける言葉が見つからないや
 華金の夕べのカフェに燈はともりそれなりに来る客がせつない
 ちぐはぐな皿とカップの行く末に少し明るい余生を願う

あうゆる部屋で

早月くら

早朝の路地裏は青 冷たさは透明度だと誰かが言った
 たましいの質量として射し込んだきみの不在を埋める可視光
 不可逆な踊りを 燃えて、燃え尽きて手足の骨が透きとおるまで
 なまぬるいゼリーのような悪夢から目を醒ましても まだ悪い夢
 水彩で描いた国に雨が降る（色あざやかな終焉だった）
 匿名になれる気がした白い花満ちる始発をただ待ちながら
 「もういいかい？」まだだよ、きみに残されたひかりをすべて使い尽くして」
 そうやって死ぬまで生きて来世でもあうゆる部屋できみを見つける

朝

廣珍堂

君はもう麦わら帽子を被りたり真夏日といふ予報の朝に
 三本の線香すでに供へられ地蔵の前にいつもの朝が
 ストレッチすれば部屋へと朝日入り腰の筋肉はつか伸びたり
 菜を刻む音の残りし厨には朝の母のまぼろし淡し
 昨夜見たアダルトビデオの肌色が漏れ出したままケースが眠る
 雪灯りまだ残りたる朝を知る遠距離通学の子の制服
 朝ドラで泣いているのを知っているトイレの中の密やかなとき
 灰色の肌着をゆるく首元に手繰り寄せつつ低血圧だと

恋は戦争、愛は闘争

福山桃歌

純白のベビードールのすべすべを鎧にすれば今宵ソルジャー
 剣を取れ、さもなくば死を 刺し殺す覚悟があるならベッドへおいで
 けだものと言うよりむしろ獅子心王こちらを射抜くまなざしの槍
 弓を引く前の一瞬張り詰める瞳に映る野生のすがた
 絆されたふりをしようかわらかいことばと肌に伝う水滴
 愛だって言えば容易く繋がれて床に転がるおもちゃの王冠
 どこまでも拡がらないで勢力図あとひと押しで崩れる均衡
 繰り返す歴史の重みで軋む閨 産む苦しみと背負う悲しみ

甘じょっぱい

まさけ

塩味であつさり食べる焼き鳥のような彼氏にさつと振られる
 いつもならしおらしく飲むレモンサワー今日はジョッキでがぶ飲みをする
 お互いで塩対応をしていたと今更気づく レモンが酸っぱい
 5杯目のレモンサワーが塩っぱくて何故か世界が滲んで見える
 頼んでもないのに出てきたたれ味のつくねの串がけっこう甘い
 大将のスキンヘッドが灯台に見えてる私はさまよう小舟
 塩辛い波間を越えていくために甘いつくねを改めて食む
 甘じょっぱいくらいの恋をしてやると月にめがけて踏んだスキップ

水風船

御糸さち

水風船むすべるようになったよとバスタブをボールプールに変えて
 百均に購^{あがな}つてきた百個入り水風船のそのありったけ
 水風船がパステルカラーに変わるまで蛇口レバーに手を添えて待つ
 風の船に水を入れたら水風船、水の船、いやそれは船じゃない
 子は笑う 一日一日に水を入れふくらませ閉じ込めてゆくよう
 水を入れすぎても笑う 割れたこと後悔しないならばそれでも
 赤く丸く大きく熟れた心臓のようだ Water balloon ぷるん
 割るまでが水風船です浴槽をあざやかにはいれやかに水葬

ありふれた女の話

深影コトハ

炎天のベランダで光る鳩除けに空に逃げたき事ばかりある
 派出所は今日も男の警官で被害を告げることなく帰る
 冷えすぎた職場を出でて火曜日のルイボスティは熱くてもいい
 紅のインナーカラー邪に吾に触れたるもの皆燃えよ
 イヤホンを外して歩く音楽は内から鳴ると言い訳をして
 風がチェーンロックを揺らす大丈夫じゃないよ外に人なんていない
 ねえこれは私じゃなくて友達の：からは大抵悲惨な話
 窓を開けて眠れば心地よき夜に錠を二重に降ろして眠る

六月の揺れる

真瑠

君のためなら死ねるけど君は「死ぬのはちよつとな」と言うほどの夏
 無口でも愛想笑いが苦手でもあなたが息をくれるから好き
 弱いののでつい癖になる一杯の「お前は俺の、俺はお前の」
 君が好き 理由は僕が六月の揺れる川面を見て決めたから
 夕暮れを並んで見たからと言ってキスをしていいわけじゃないのに
 黒板をきれいに消してたような君 僕のそばではわがままな女^{むすめ}
 「要らなくても捨てられない」僕の彼女のある程度散らかった部屋
 村雨と日差しを混ぜて抱き締める どこにも行くなどどこにも行くな

翼の有無

丸瀬まる

飛ぶことはできないけれど見てしまふ天気予報が伝える風向き
 少しずつ部屋着としての生き方を覚えはじめているワンピース
 思い出はタッパーの中 あたためるたびに会いたくなる人がいる
 この白い壁がくすんで白かった壁へと変わるときまで暮らす
 Tシャツがはためいていてベランダはすべて翼を持っていること
 もし砂が落ちなくなってしまうても砂時計ってあなたを呼ぶよ
 逃げ出した ページをめくる音だけが遠い世界を教えてくれて
 自分では自分の背中が見えなくて翼の有無をだれも知らない

朝顔だとわかる

水沼朔太郎

おにぎりですれが朝顔だとわかる絵しりとり（紫陽花と思った）
 日没の太陽なのにきみの撮る画角のせいで月に見えてる
 かんたんに汗をかいたりかんたんに汗がひいたりボナナス前夜
 眼科に行つて視力検査を受けてきて目線を少し下げることにした
 暑いけど歩き足りない 川沿いを歩くルートでスパーへ行く
 川沿いで西日と風が喧嘩する 日傘では仲裁はできない
 六月に蟬が鳴いてる真相をトイレの中で知ることになる
 クーラーを消すタイミングを失った今日の終わりに飲む熱いお茶

祈りの行方

水也

祈る先見当たらないままで眠る明日はこなくていいのだから
 忘れたい忘れられない歌声が今も私を蝕んでいる
 彷徨うのゆらゆら足は当て所なくポラリスはもう消えてしまった
 鮮やかな青を失くした世界では何色もなく不具合せだけ
 届かない理想郷など意味もないあなたがいないべールを捨てた
 雨粒の叩きつけてるアスファルト足を踏み出す勇氣はないの
 空っぽの舞台で踊るひかりふる息ができない気がしているよ
 薔薇の下いつまでだって待っている棘を伝って染み込む祈り